

第9回 Asia Travelling Fellowship 紀行記—香港・インドネシアを訪ねて—

野村 裕

広島赤十字・原爆病院整形外科

岡田英次郎

東京都済生会中央病院整形外科

香港大学 Queen Mary Hospital
(2014年11月22日-28日)

中国の特別行政区である香港の香港大学 Queen Mary Hospital を訪問しました。香港は人口700万人超の大都市で、街中のみならず、大学病院も多くの患者さんでいっぱいでした。病院内は病棟も手術室も広く、近代的な印象を受けました。手術は Wu 先生執刀の4症例を見学させて頂きました。他施設で手術を受けた患者さんのサルベージ手術が多く、難易度の高い症例ばかりでしたが、Wu 先生は止血操作が丁寧なため術中出血が少ないことに感嘆いたしました。回診中は Luk 教授や Cheung 教授から鋭い質問が英語で次々と飛んでくるので、常に緊張感が漂っていました。医師もコメディカルも英語が堪能で、スタッフ同士の会話やオーダーは全て英語で行い、その一方で、患者さんには広東語で優しく話しかけていました。香港大学は特発性側彎症に対する“fulcrum bending radiograph”で知られており、多くの脊柱変形の患者さんがいました。側彎カーブの柔軟性をレントゲンで詳しく分析し、できる限り短い固定範囲で且つ少ない椎弓根スクリューで矯正を行うことにこだわる姿勢は、われわれにとって斬新で勉強になりました。最終日に、大学スタッフの方々へ日本での臨床研究を発表する機会を頂き、野村は円筒レトラクターを用いた顕微鏡下腰椎除圧術の手術成績を、岡田は頸椎 MRI の長期縦断研究を発表しました。特に、頸椎椎間板の研究へ関心を寄せて頂き、Luk 教授から香港大学との共同研究を提案されました。Queen Mary Hospital へは中国本土からの fellow も多く研修に来ており、滞在中その先生たちとも仲良くなりました。そのなかで、同じ中国であるにも関わらず、香港と中国本土では保険システムや医療事情が大きく異なることを教えてもらいました。

香港は世界的に有名な観光都市です。ビクトリア



図1 香港大学 Queen Mary Hospital にて
前列左から2番目より Luk 教授、野村、岡田、
Cheung 教授

ピークから見渡す百万ドルの眺望や九龍半島からの幻想的な夜景はわれわれにとって忘れることのできない思い出となりました。訪問時は普通選挙を求める学生運動の真最中で、この運動は連日世界中で報道されていました。辛亥革命を成し遂げた孫文を輩出した香港大学医学部らしく、キャンパス内でも盛んに運動していました。改めて中国が一つの政党に支配されている国家であることと、多くの若者は真の自由を求めていることを感じました。

アイランガ大学
(2014年12月8日-13日)

12月に訪問したにも関わらず、日中は30度を超す暑さ、街に溢れる人の多さにとっても驚きました。大学のあるスラバヤはインドネシア第二の都市ですが、公共の交通手段がほとんど無いためにバイクによる外傷症例が多く、スラバヤだけで日に10件以上の開放骨折の患者さんが搬送されるとのことでした。また病棟